

# Rio

リオ  
豊田市矢作川研究所 月報

## CONTENTS

- 流域委員会と結果の相互承認
- 連載 矢作川のいきもの 10
- 今月の一枚
- シラカシとアラカシ
- 読者からの手紙
- 研究所の調査風景

2004 February  
No.70

### 豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028  
homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/index.html> e-mail [yahagi@hm.aitai.ne.jp](mailto:yahagi@hm.aitai.ne.jp)

\* Rioはホームページ上でもご覧になれます

## 流域委員会と結果の相互承認

古川 彰

各地の河川で水系流域委員会が活発に動き始めている。なかでも淀川水系流域委員会は2003年1月には河川管理者に「提言」を提出、さらに、それを受けた管理者側から同年9月に出された「淀川水系河川整備計画基礎原案」に対しては、同年12月に意見書を提出した。2001年2月の委員会設置から意見書まで2年、会議は大小あわせて二百数十回に及んだという。

この流れをみて「おやっ」と思われた方もあるだろう。これまでのこうした委員会の通例は、管理者側から出された原案を、非公開で肅々と審議して、ほぼ原案賛成というのが相場であった。ところがこの委員会では「基礎原案」がかなり審議の進んだ段階で、しかも委員会側の「提言」を受けて出され、さらにそれに委員会側からの「意見書」をつけて閲覧に供されるという手続きをとったのである。もちろんすべての会議は公開であった。

1997年の河川法改正に関してはこれまでの治水・利水に加えて「環境」が加えられたことが強調される。しかし、じつはそれ以上に次の点が重要な意味をもっているのではないか。改正では、これまでの「工事実施基本計画」にかわって、長期的な「河川整備基本方針」と、直近20、30年間の河川整備の具体的な内容を示す「河川整備計画」を策定することが決められ、後

者については地方公共団体の長、地域住民等の意見を反映する手続きが導入された。つまり明治以降、河川管理者である国家に独占されてきた河川管理に対して、地方公共団体と地域住民にも意見を述べる可能性が保証されたのである。各地の流域委員会はそれを受けて設置されたのは言うまでもない。

地方公共団体と住民の管理への参加という「可能性」は、今後の河川行政を大きく左右するに違いない。淀川水系流域委員会の提言や意見書の直接的影響ではないにしても、国交省が全国7水系に対して策定中の新たな水資源開発基本計画では「新たな利水ダム建設計画を盛り込まない方針を固めた」(毎日新聞2004年1月11日)というような動きを創り出していくだろう。

この動きを素直に喜びたいが、ふたつだけ考えておこう。ひとつは住民参加が「可能性」としてあるにすぎず、その可能性は常に利用し続ける覚悟を要請しているし、参加の意味を確認し続けるのでなければ、早々に形骸化してしまうに違いないという点である。

もうひとつは、今後、流域委員会は大きな流れとして、これまでのダムをはじめとする事業の中止や見直しという方向に動くことだろう。それは1997年の河川法改正の理念としても当然のことである。しかし、その場合に必要なのは、すでにダム建設が決定し、水没地域の住民の移転が終了したり、決まりました地域の住民への配慮である。苦渋の決断の末に移転した人びとに対して、移転は必要ではなかった、と宣言することの意味の重さを十分に配慮した施策が必要であろう。つまり住民参加の結果は、委員会の成果としてあるのではなく、その結果を住民全体が相互に承認できることによってはじめて十全たり得るのだとの確認である。

(ふるかわ あきら、関西学院大学社会学部 教授)



「第1回 矢作川流域委員会」の様子（平成15年6月30日）

委員会は、学識経験者11名、自治体長3名、流域団体3名、流域住民(公募)3名、報道関係者1名で構成、「矢作川水系河川整備計画(大臣管理区間)」策定にむけた指導・助言をおこなう。第2回は平成15年9月29日に開催された。

# ハゲギギの生活

佐藤憲児

ハゲギギとは関西地方を本来の生息域とする体長30cmにもなるナマズ目ギギ科の魚類です。矢作川流域には、琵琶湖産稚鮎の放流にまぎれて侵入したと考えられています。生活範囲は通常は水深10cmの浅瀬ですが、琵琶湖では、水深約30mに仕掛けられる網に掛かるところから、広範囲にわたる生活圏を持つことが窺えます。昼間はヨシ群落内や流木・石の下などに潜み、夜間や濁流時に泳ぎだして餌をとっています。

私は2003年6月から11月末まで、卒業研究としてハゲギギの食性を調べるために、古崩水辺公園付近の矢作川で、潜水調査を行いました。初めての調査地で手探り状態であったのに加え、長雨による低水温と高水位に悩まされながら11月末まで調査を行いました。採集個体数の目標は、100尾以上だった



資料：研究所のハゲギギ

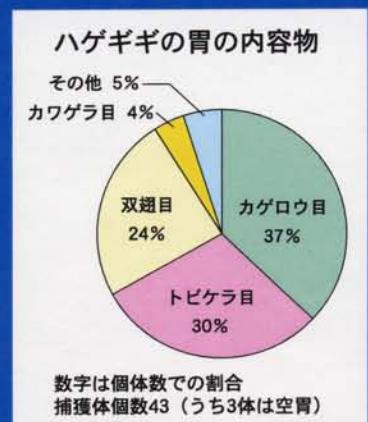
のですが結局は40尾にとどまりました。

このような苦労の多い調査でしたが、やはり楽しみも見つけられるものです。我が家では、調査観察用にハゲギギを飼育しているのですが、カレの生活様式がとても面白いのです。カレは水槽内から外の様子を伺っているようで、人影が現れると隠れ家として用意した管の中にさっと逃げ込むのです。その後、人影がある間は殆ど隠れたままです。しかしそのくせ、目の前に餌を入れてやると恐る恐る顔を出して餌をくわえ、そのまま後ずさりして隠れ家に餌を持ち込むのです。非常に可愛らしいのですが、ギギ好きの僕としては、もう少し姿を見せてくれればなあ…と、気配だけの水槽を見つめる日々が続きます。

さて、肝心の食性ですが、生きたまま吐き戻させる方法（水で薄めたアルコールの中にギギを泳がせ、酔って動きの鈍くなった所にスポットで水を飲ませてお腹を軽く押して吐き出させる）で胃内容物を調べたところ、捕食の中心はトビケラの幼虫などの水生昆虫が中心で稀にシジミの殻や魚類のうろこが出てくるという状況でした（円グラフ参照）。

この一年の調査で、興味は増すばかりです。修士課程に入る来年度は、引き続きハゲギギの調査を進めるとともに、近縁種や異なった環境での同種の食性も調べていきたいと考えています。

（さとうけんじ、  
名城大学農学部）



逢妻男川のカルガモ  
(二〇〇四年一月 豊田市広田町にて  
吉鶴靖則撮影)



今月の一枝

# シラカシとアラカシ

中坪孝之

冬も葉が枯れない広葉樹の森、照葉樹林は西日本の平地を特徴づける植生です。この照葉樹林を代表する樹木にカシがあります。もっともカシという種類の樹木はなく、例外もありますが、一般的には常緑のコナラ属の種を○○ガシと呼んでいます。日本には雑種を含めると10種以上が知られていて、矢作川流域でも数種類が生育しています。シラカシとアラカシ（写真1）は、西日本に広く分布しているカシの代表格で、並木や屋敷林、生け垣として植えられることもあります（写真2）。



写真1 アラカシ *Quercus glauca*

シラカシとアラカシは似ていますが、シラカシの葉がスマートで縁のぎざぎざ（鋸歯）が葉の下半分にあるのに対し、アラカシの葉は幅広く、大きめの鋸歯が葉の上半分に集中しているので区別できます（写真3）。コナラ属の樹木にはどれもドングリになります。これは果実に相当するもので、付け根の部分はいわゆる壳（殻斗）に覆われています。シラカシとアラカシのドングリはよく似ていて、壳には横縞があつて小さなお椀のように見えます（写真1）。



写真2 アラカシの生け垣（京都、東福寺）

西日本のマツ枯れが猛威を奮った場所で、現在カシ林になっていることがあります。これは実生の耐陰性に原因があります。アカマツ林内は暗いため、アカマツの実生は生きていけませんが、カシの実生は耐陰性があるので育つことができます。

このためアカマツが枯れてしまうと、その後はアカマツではなく、カシが優占する林となるのです。このような方向性をもった変化を遷移といいますが、シラカシやアラカシは遷移の後期に出現する代表的な樹種といえます。シラカシやアラカシの実生は矢作川のマダケ林の中にも見ることができます。もし、河岸を破壊するような大規模な洪水がなく、長い間人手が加わらなければ、やがてはカシの林になってゆくでしょう。



写真3 アラカシ（左）とシラカシ（右）



写真4 檜の木刀。上が白檜、下は赤檜

漢字で檜と書くように、カシの材はとても堅く、古くからさまざまな用途に利用されてきました。現在でも、強度を要するスコップの柄や高級傘の軸にカシ類の材が使われることがあります。また、武道で使われる木刀や六尺棒は、圧倒的にカシ類が多く使われています（写真4）。針葉樹などの材では激しく打ち合ううちに簡単に折れてしまうのです。

日本人は昔から木の性質を熟知し、それぞれに合った用途に利用して独特の文化を築いてきました。プラスチック全盛の現代ですが、先人の知恵の結晶である「木の文化」も大切にしていきたいものです。

（なかつぼ たかゆき、

広島大学大学院生物圏科学研究科 助教授）



## 恥ずかしいとは思わないのか

—西の浜「亀の子隊」活動に参加して—

倉地 格

西の浜はゴミ箱じゃない。  
子ども達のこんな怒りの声を知  
ったのは、何気なく見ていたテレ  
ビの特集番組からでした。

西の浜とは、三河湾に面した伊良湖岬の灯台から火力発電所に向かって約10km続くリゾート地の砂浜で、海釣りの長い竿が立ち並ぶとともにサーフィンのメッカでもあります。よく晴れた日には篠島や衣浦港などが遠望できる所です。風光明媚な浜辺には潮流に乗って運ばれて来た三河湾や伊勢湾の膨大なゴミが打ち上げられていました。なかには矢作川流域の地名が付いたゴミも沢山あるそうです。

この浜のゴミのクリーンアップ活動をするのが「亀の子隊」です。渥美町の小、中学生57名が登録して頑張っています。現在では保護者達によ

る「親亀隊」や一般的ボランティアなどにより、その輪はますます広がっています。

去る11月16日、アド清流愛護会と豊田市役所河川課有志は、現地の実情調査を兼ねて亀の子隊の活動に参加しました。

「水に水源尋ねれば始めは苔の雫なり」とか。山の岩間の水滴が、平野部を滔々と流れる大河となり、やがて海へ、そして雲となり雨となって山へと帰る。この果てしない水の旅が続く限り、人も動植物も無限に続いている。西の浜の活動を体験して、山から川、川から海、海から山へと、互いに活動を発信し合うことの大切さを痛感しました。

浜でゴミを拾い続ける亀の子隊。その目の前でポイ捨てをする釣り人よ、観光客よ。

恥ずかしいとは思わないのか。

(くらち いたる、アド清流愛護会)

### 第9回 豊田市矢作川研究所シンポジウムの案内

入場料 無料



日 時 平成16年2月16日(月)14:00~17:00 場 所 あいち豊田農協2階ふれあいホール  
 基調報告 「川辺から見た矢作川の変化—古岸プロジェクトの成果から」洲崎燈子・小川都(豊田市矢作川研究所)  
 パネルディスカッション 「矢作川のむかし・いま・そしてこれから」  
 パネラー／辻本哲郎(名古屋大学大学院工学研究科教授) 嘉田由紀子(京都精華大学人文学部教授)  
 梅村鶴二(豊田市矢作川研究所所長)  
 コーディネーター／古川 彰(関西学院大学社会学部教授・豊田市矢作川研究所研究顧問)

## 研究所の 調査風景

12月8日(金)

古岸プロジェクトの成果を河川環境改善のための具体的な提言につなげる試みの一環として「矢作川中流域の環境復元のための勉強会」が連続で開かれることになり、その第1回目として内田臣一氏(愛工大土木工学科)による発表「川を元気にしよー古岸プロジェクト成果からの提案(試案)」が行われました。2000年度から続けられている野外調査によ

る豊富なデータと過去の資料に基づき、アーマー化(河床の固化・粗粒化)の軽減と水生生物の生息環境改善をめざしていくつかの具体的な提案が示されました。後の討論では、ダムの運用規則など、河川管理に関する基礎知識の共有化を進めていく必要性が確認されました。(洲崎)

1月6日(火)

昆蟲公園、児口公園、樹木神社にキリガの調査に出かけました。冬期の夜間に飛ぶにはフユシャク(Rio58参照)以外にキリガというグループがいます。しかし、KT火に集まらない種類が多く、今回の調査

では、これを、糖蜜(黒砂糖をビールで溶かした液体)で誘引しました。当日の最高気温が13.1℃(豊田測候所調べ)と暖かく、夜間の多数の飛来を期待したのですが昆蟲公園以外は期待を裏切る結果となりました。特に児口公園は全く飛来がなく、原因解明の必要を感じました。(間野)



資料：樹液に飛来したチャマダラキリガ(♀)  
(1988.3.13.四日市南部丘陵)

## 編集後記

早いもので、今年もシンポジウムの季節となりました。今年のテーマは「古岸プロジェクト」。扶桑町の川辺の変遷を通して、矢作川のこれからを考えます。皆様のご参加をお待ちしております。(小川)

ご意見・ご感想をお寄せください

Rioは再生紙(100%)を使用しています